

**一環境に優しい農業が注目を集めているが、
それぞれの受け止めは。**

吉川 農業は、環境負荷を掛けることもあれば、環境を守ることでもある仕事だと思う。酪農は、牛のげっぷに含まれるメタンガスに温室効果があるなど問題になっている。負荷を減らすには、飼育頭数を減らすこと。そしてストレスをかけずに長生きさせ、出産の回数を増やす。それには放牧が適している。



2016年にニュージーランド酪農を視察したが、既に培養肉との競合や（家畜にとって快適な飼養環境を目指す）アニマルウェルフェアについて話をしていて、先進的だと感じた。



泉 化学肥料を使う以前は、どこも経営面積や機械も少なく家族経営をしていた。祖父の代に出てきた化学肥料によって収量が増えて、それは“魔法の薬”だった。しかし、頼りすぎると土の腐植や微生物の状態が崩れ、農薬がないと収量が確保できなくなってきた。一方、化学肥料は価格が上がり海外情勢で手に入りにくい。鶏ふんや堆肥など、なるべく国内で調達できるものを使う持続可能型の農業への関心は高まっている。

3月に十勝総合振興局などと「とかちオーガニック振興会」を立ち上げたが、多くの若い農家が参加してくれた。帯広市川西農協の青年部からも話を聞きたいと言われた。何かアドバイスできればいいと思っている。

相馬 農業試験場の役割は、いかに生産量を増やすかが研究のベースにあった。しかし、それだけでは土地本来の生産力が損なわれていく。道では、収量や品質を落とさずに、化学肥料や農薬を必要最小限にしていく「クリーン農業」を30年来進めてきた。みどり戦略やカーボンニュートラルの動きなどが農業でも大きな目標になってきている。



研究者の中では、作物や病気の状況に応じて、最小限の化学肥料や農薬をどう効果的に使っていくか、組み立て方や使い方の判断を助ける研究が行われている。

一農業が環境負荷の低減、温暖化防止のためにできることは。

吉川 酪農では、配合飼料を海外から輸入する過程でも、化石燃料を使って温室効果ガスが出る。私は道産のビートパルプや子実コーンを与えているが、国産飼料を使えば環境負荷は減り、国内の経済循環にもなる。これらは放牧でなくても取り入れられるものだと思う。

ふん尿処理のバイオガスプラントは、集合型で遠くの牧場から輸送距離が長いなら化石燃料を消費するので、計画や集約度次第にな



子実トウモロコシを導入して道産の自給飼料100%で牛を育てる吉川さん（左）